

廣福寺だより

大遠忌法要特別号



真宗佛光寺派
柏原山 広福寺



御親言御代読

恵照御門主様の「御親言」を真覚新門様が代読されました。

本日は、新潟教区第四組・広福寺様におかれまして宗祖親鸞聖人七五〇回大遠忌法要がお勤まりになりますこと、誠に嬉しく思います。今日の日のを迎えるに当たりまして、ご任職を初め門信徒の皆様方には、一方ならぬご苦勞をいただいたことと思ひます。日頃よりの御法義相続に深く感謝の意を表するものでございます。

本来であれば、直接お伺いして皆様方に親しくお話を申し上げるべきところ、私の高齢のため、このような形を取らせていただきまますことは、大変残念に思っております。

顧みますと親鸞聖人は貴族社会から武家社会へと世の中が大きく動き始めた平安末期に生を受けられ、九歳でお得度をなされて仏門に入り、比叡山にて二十年間、学問と修行に励まれました。しかし、迷いの道を断ち切ることができず、二十九歳の御時、京都・六角堂において聖徳太子のご示現を得て、ついに黒谷の法然上人のお弟子となつて、一筋にお念仏する身となられました。また三十五歳の時には、承元の法難により越後にご流罪となられました。五年の後、ご赦免となり、一旦京の都にお帰りになつて、今は亡き法然上人の御跡を訪われ、さらに山科の地に一字を建立されました。これが佛光寺の草創であります。その後まもなく、関東に移られ、多くの人々と生活をともにされながら、自信教人信の道を歩まれました。ご晩年は京都で、『教行信証』の完成などの他、多くのお書物を著されましたが、ついには御年九十歳にて、弘長二年十一月二十八日午の刻にお浄土に御還りになられました。

佛光寺では、大遠忌お待ち受けの標語に

「変わる時代 変わる心

変わらぬ苦悩 変わらぬ念仏」

を掲げてまいりました。親鸞聖人は世の中がどの様に変わろうとも、またどうしても煩惱から離れることのできない私たち凡夫でも、本願を憑み、お念仏しようという心が生ずれば、阿弥陀様のおはたらきによって、自在の身となり、あるがままを喜んで受けていける人生をたまわると仰せになつておられます。

その親鸞聖人の七五〇回忌をお勤めする今日、世の中は聖人ご在世の当時から想像さえもおよばない豊かさや便利さの中に、多くの人は長寿を享受しております。その一方で、社会には無慙愧な行爲が蔓延し、人々は孤独感に苛まれ、いよいよ苦悩の色を深めています。

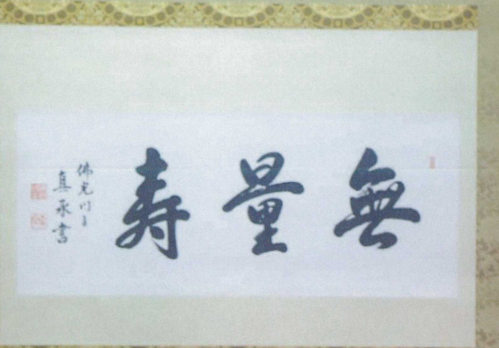
今こそ親鸞聖人の歩まれたお念仏の大道に立ち帰るべき時でありましょう。

この度の御法要は、何よりのおおきな御催促と戴いて、聖人のご苦勞をおしのびし、お得をお讃えしてまいりたく存じます。今日ここにご参詣の皆様方には、それぞれに賜ったいのちを大切に、おかげさまのお念仏と共にどうぞお健やかに過ごされますよう念じております。本日はようこそお参り下さいました。

平成二十九年六月十一日

恵照

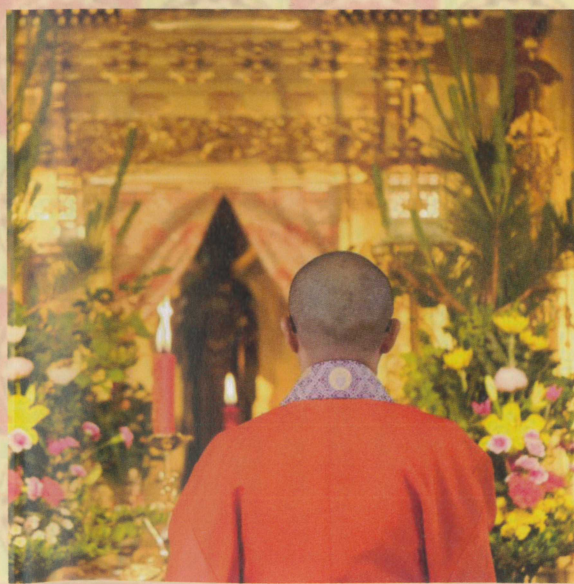




◆真覚新門様御親修法要◆

―初めての地方への御下向―

このたび真覚新門様をお迎えして「宗祖親鸞聖人七百五十回大遠忌法要」を御親修頂くことができました。
渋谷真覚新門様は本山佛光寺第三十代御門主の真承上人の御長男で、昨年十一月に法嗣御得度式を終えられました。この度、地方寺院で御親修法要をお勤めされる最初のご縁を、広福寺が頂きました。法要前日にお立ち寄りになられ、準備中の法要実行委員の皆様も、お目にかかることができました。
法要当日は帰敬式、庭儀式、記念撮影、勤行と過密なスケジュールの中、堂々と御導師をお勤めになり、恵照御門主様からの御親言の御代読を頂きました。
写真の「無量寿」の掛け軸は、お父上の真承上人の御染筆です。



真覚新門様をお迎えして

広福寺住職 柏原 雅史

真覚新門様をお迎えして「宗祖親鸞聖人七百五十回大遠忌法要」を円成するこゝができました。お力添えをいただきました。またご寺院様方、門信徒の皆様にお礼を申し上げます。

法要当日の千秋祭で、住職謝辞の折に「あつという間に、大遠忌法要の時間が過ぎて行きました」と述べましたが、当日の時間の経過は驚くほど速く感じられました。願随寺様をはじめ会行寺、会奉行のご寺院様方、広福寺世話方、実行委員の方々には幾度となくお集まりいただきました。これまで準備に当たられた皆様の力の積み重ねが、当日の凝縮された時間の流れとなっていたように感じられました。ゆっくりと村内を進む華やかな



庭儀式（稚児行列）、新潟祭所の皆様の雅楽の響き、本堂いっぱい広がる声明が、今でも鮮明に心に浮かんできます。法要が近づいてくると、やらねばならないことが次々と頭に浮かんできて、毎日たくさんメモを壁に貼りつけていましたが、当院と若坊守が分担して次々と仕事をこなしてくれました。当院は青壮年の実行委員会の中心となり、若坊守はお練りの稚児の担当で、お陰様でそれぞれ地域の皆様とのつながりを作ることができました。
法要後の祝宴では新門様から「生涯の記憶に残る法要となりました」というおことばをいただき深い感銘を受けました。佛照寺様のご布教にありましたように、この法要を五十年に一度のイベントに終わらせず、門信徒の皆様とともに新たな聞法の歩みとして行くことを肝に銘じております。

大遠忌を終えて

広福寺当院 柏原 貴也

晴れ渡る青空の下、「宗祖親鸞聖人七五〇回大遠忌法要」を勤めることができました。大変うれしく感じております。

大遠忌法要の計画が持ち上がり、当日を迎えるまでの間があつという間に過ぎていったように思います。願随寺様、慶念寺様をはじめとする会行事、会奉行のご寺院方、世話方実行委員の皆様には大変お世話になりました。またお参りいただいた大勢のご門徒の皆様には感謝申し上げます。

実行委員会として、青壮年の方を中心に協力をお願いしました。皆様快く引き受けて下さり、私も地域の方々と深いつながりを作ることができました。本堂の落慶法要の際に実行委員を務めた方が各係の中心となり、円滑に準備を進めてくださったお陰で、大きなトラブルもなく大遠忌法要を勤めることができました。この大遠忌法要をきっかけとして、より一層お念仏の音が響き渡る広福寺となるよう、これからも努力して参りたいと思います。

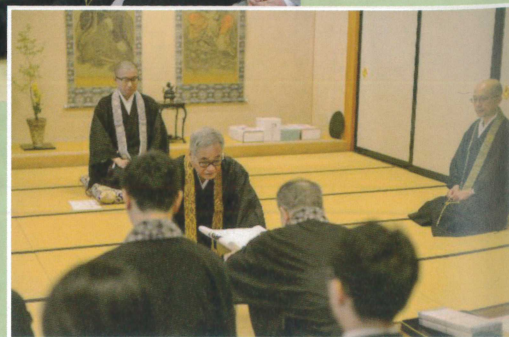
平成二十九年 六月十一日
宗祖親鸞聖人七五〇回大遠忌法要



快晴
涼風吹き渡る



対面式





お帰
かみ敬
みそり式

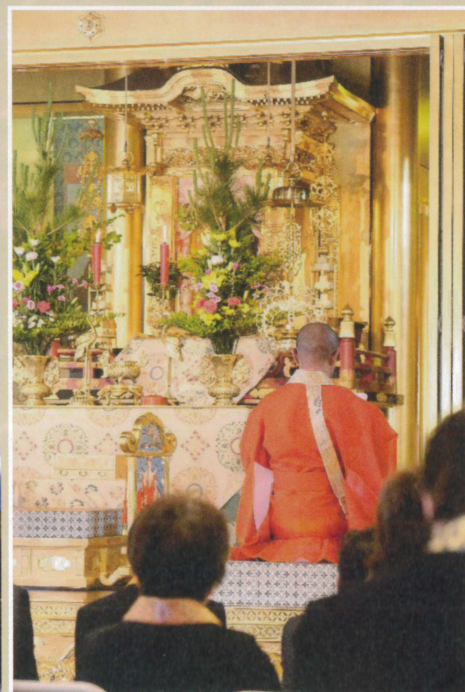


新たに十四名の方が
仏弟子に



武石多喜男さん
和歌浦義信さん

法名授与
誓いの言葉





お庭てい
ね儀ぎ
り式しき



稚児 51名
美しい衣装・腕輪念珠に
仏華を持って歩みます





0歳児から
中学生まで



華やかな
稚児さんが
いっぱい
です





あなたは何歳？



法要の準備 整う

二度目の大遠忌

広福寺世話方 平岡清夫

今回の大遠忌は、私にとって二度目のこととなります。前回の大遠忌は昭和五十八年の九月でした。お練りの際に御門主様の朱傘を担当する菅保さんから、一人では自信がないと頼まれたのです。お練りの途中で早めに朱傘の役を交替し、真照御門主様の後ろを歩みました。その時の写真は額に入れて、今でも茶の間に飾ってあります。今年の大遠忌には、世話方として参加しました。任職から、もう一度朱傘の役をやってもらえないかと頼まれ、引き受けました。当日境内で朱傘を持って真覚新門様の後ろにおりますと、宗務総長様から「二度目のお役目で、ご苦労様ですね」と声をかけていただき、新門様からも「ご苦労様です」とおこたをいただき、緊張がほぐれてうれしい気持ちになりました。晴れ渡った空の下、雅楽の響く中でのお練りを新門様とともに歩んだことは大切な思い出です。



勤行



入堂



表 白

ひょうびやく

新門様が親鸞聖人七五〇回
大遠忌法要の意義を
表白されます。



賦 華 籠

ふけろ

稚見十二名が衆僧に
花びらを届けました。





僧侶、参拝者の皆様が、共に唱和しました。
美しく力強い声明が本堂に響き渡りました。

行譜正信偈

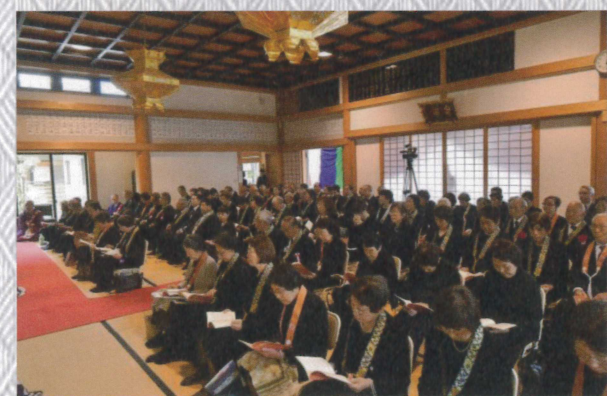
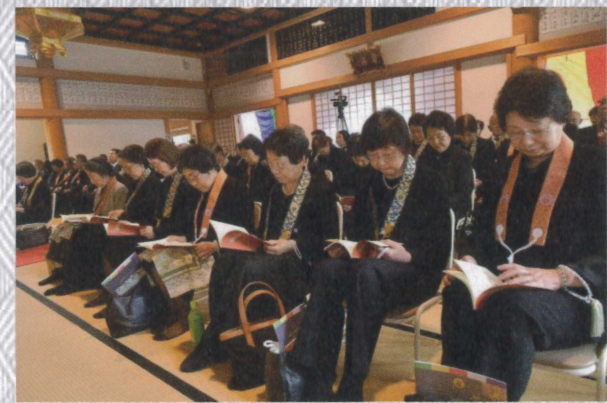
ぎょうふししょうしんげ



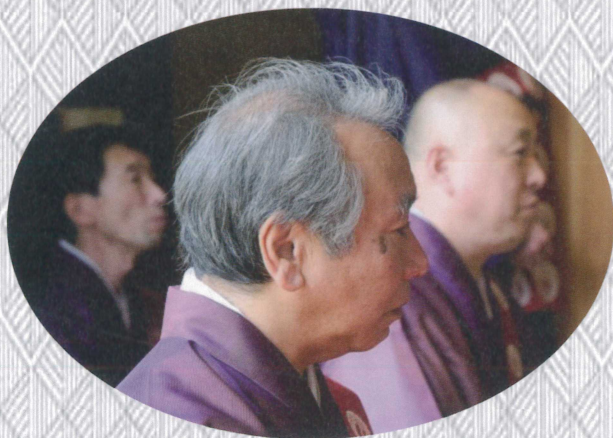
法要に先立ち、華を散らして、
仏様を迎え入れます。
美しく荘厳な法要が始まります。

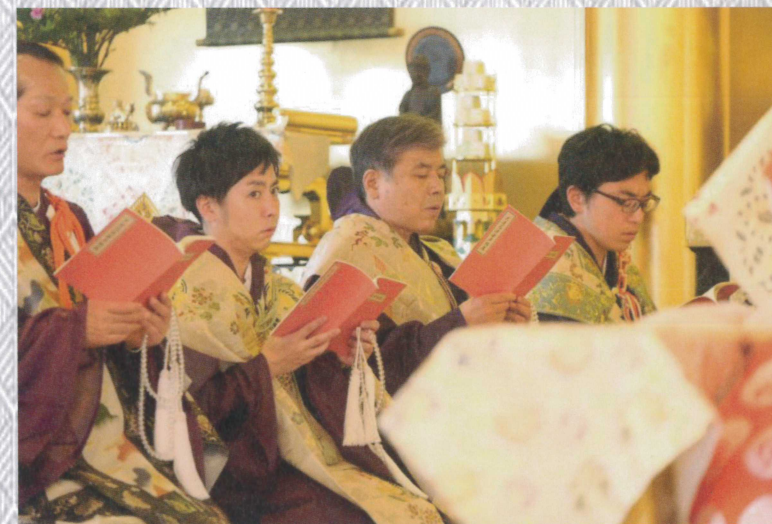
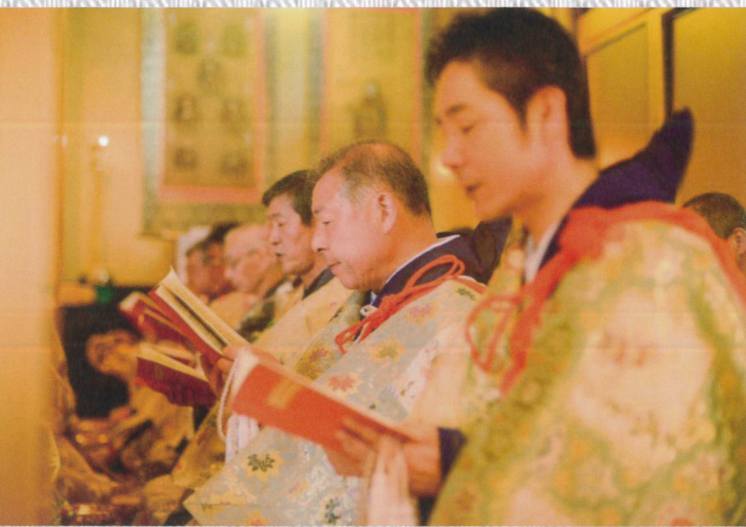
散華

さんげ



佛光寺派新潟教区の御寺院を
中心に32か寺40名の僧侶の
皆様にご参加を頂きました。





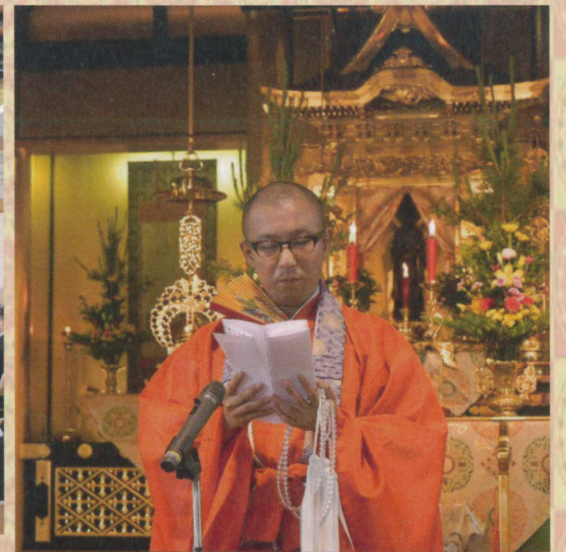
当日の御寺院、
雅楽の新潟楽所の皆様、
ご参拝の皆様、実行委員の
皆様、稚児とそのご家族を
含めると総勢三百名以上に
なりました。





◆ 千秋楽

宗務総長
佐々木 亮一 師
御挨拶



◆ 御親言御代読



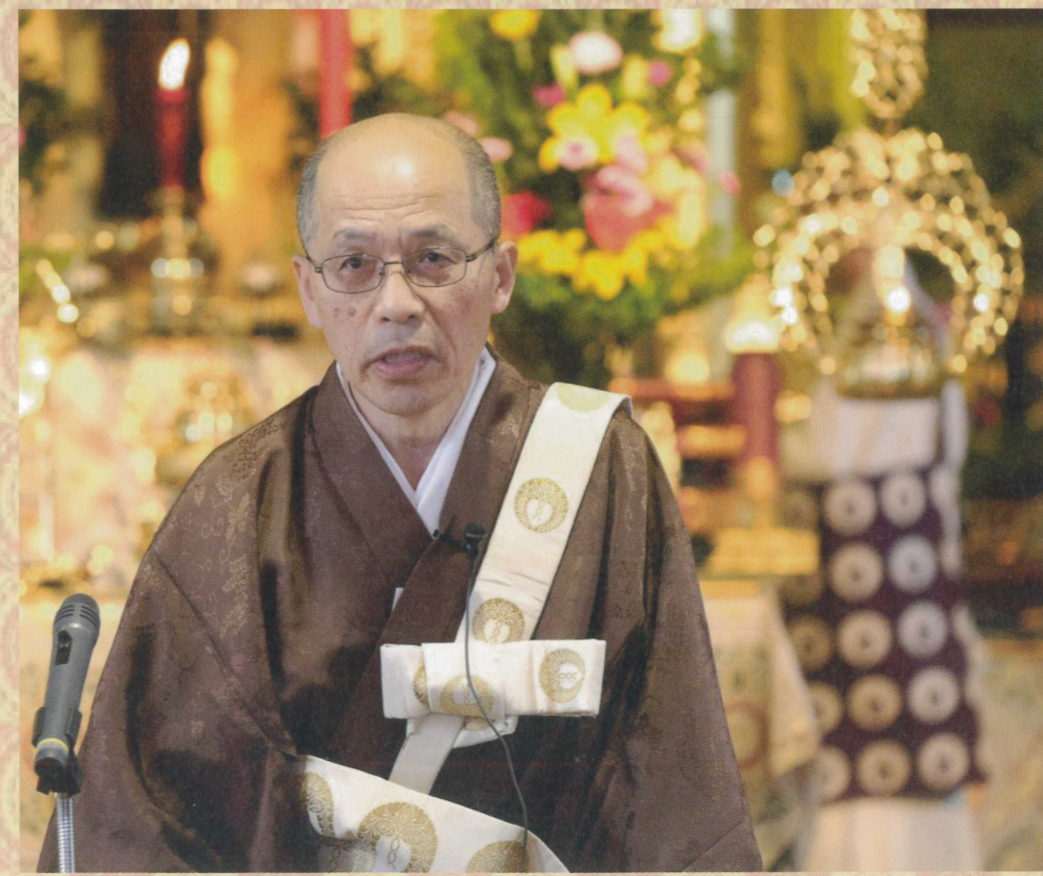
世話方代表

木村 三千雄 氏 謝辞

住職謝辞

◆ 法話

差向布教使
打越 佛照寺住職
花井 性寛 師





実行委員の皆様には
てきぱきとご活躍頂きました。
責任感の強い方々に
恵られました。





法要までの準備



御寺院方、御門徒の皆様、稚児の代表も前日の準備にご参加いただきました。



法要前日は雨でした。当日のお天気が気になります。





帰敬式

受式される方が
法名を考えます



おみがき

あつという間に
仏具がピカピカに

黒鳥の威徳寺の皆様
丸一日かけて仏華の
華立てをさせて頂きました。



威徳寺様による
仏華の華立て



宗祖親鸞聖人750回



大遠忌法要記念撮影



御親修

本山佛光寺

真覚新門 様

随行长

真宗佛光寺派宗務総長 佐々木亮一 師

随形式務衆

本山職員

竹林 栄哲 師

本山職員

吉田 譲 師

差向布教使

打越 佛照寺住職 花井 性寛 師

会行事

新潟 願隨寺住職 河合 正樹 師

保古野木 慶念寺住職 照田 昇準 師

溝 清伝寺当院 古谷 清文 師

打越 佛照寺当院 花井 暁信 師

会奉行

中島 大蓮寺住職 鷺澤 文雄 師

船越 浄源寺住職 佐々木昭裕 師

須頃 西照寺住職 原 泰雄 師

法要顧問

月瀉 梵行寺住職 木村 俊尚 師

○門徒総代

大谷 統司

○世話方

麓二区 平岡 清夫

麓二区 堀内 拓

麓二区 山岸 哲也

麓二区 近山富士弥

麓一区 木村三千雄

麓一区 武石 金衛

○地区総代

観音寺 丸山 正己

村山・境江 武石 建夫

走出 戸叶 精一

弥彦 武石 稔

山崎・山岸・井田 松居 幸彦

矢作・荻野 渡辺 忠

長崎 松井 辰義

辰ノ口 竹之内泰次

本町・和納 加藤與志明

幕島・京ヶ入 八子 和之

伶人 新潟楽所

黒鳥 威徳寺住職 源川 法城 師

当院 源川 宗城 師

若坊守 源川 容子 師

他九名

出仕者

第一組 新潟 願隨寺当院 河合 正敬 師

新潟 凡聖寺当院 新井 猛士 師

小針 瑞林寺住職 廣澤 晃隆 師

中野小屋 善宝寺住職 渡邊真理子 師

善宝寺当院 渡邊 尚一 師

五之上 巖念寺住職 川村 克巳 師

井随 法讚寺当院 雲郷 真 師

第二組 萱場 玄龍寺住職 山際 玄忍 師

稲葉 頓了寺住職 稲葉 貞宣 師

熊谷 善養寺住職 福島 正彦 師

月瀉 梵行寺住職 木村 俊尚 師

梵行寺当院 木村 恭裕 師

○実行委員

大谷 浩美 大谷 幹子

柏原 路子 唐澤 仁

熊谷 一雄 熊谷 洋子

小林 一夫 小林 忠秋

小林 透 小林 治夫

酒井 秀明 菅 真人

高島しのぶ 高橋 茂

武石 肇 武石 雅史

竹之内 昇 竹之内敏宏

竹之内義徳 竹之内光義

近山統一郎 近山 一久

近山 フミ 近山 富貴

中村 勝 林部 功

林部 良雄 平岡 悟

平岡 智 平岡 敏行

広沢 ケイ 堀内 翔

本多 匠 松井 義之

松宮 千春 森田 幸子

八子 薫 八子 仁

山岸 謙介 山岸 正樹

山岸 基夫 山岸 裕子

山岸 理湖 和歌浦義信

渡邊 晃 渡邊 健

第三組

井田 照瑞寺住職 日野 宣也 師

矢作 法圓寺当院 梨本 雄哉 師

溝 清伝寺住職 古谷 清磨 師

米納津 林應寺当院 村上 信之 師

八王寺 安了寺住職 松島 孝夫 師

三条 徳誓寺住職 福井 憲雄 師

第四組

出雲崎 万因寺当院 高橋 修円 師

夏戸 本光寺住職 松島 祐祥 師

寺泊 長善寺住職 菊地 泰法 師

寺泊 聖徳寺住職 窪澤 真一 師

中島 大蓮寺当院 鷺澤 大雄 師

吉田本町 広海寺住職 佐々木惠陵 師

麓 心光寺住職 柏原 了永 師

麓 広福寺住職 柏原 雅史

親戚寺院 広福寺当院 柏原 貴也

卷 妙光寺住職 井上 慶永 師

大面 長念寺住職 山之内浩乘 師

お陰様にて宗祖親鸞聖人七五〇回大遠忌法要を円成することができました。ここに記載した皆様、お参り頂きました門信徒の皆様、心より御礼申し上げます。

廣福寺住職 柏原 雅史
前坊守 柏原 朝子
当院 柏原 貴也
若坊守 柏原 祥子
長男 寛也





南無阿弥陀仏はわたしのいのち

広福寺

検索

<https://koufukuji-yahiko.net>

発行所 広福寺 〒959-0318 新潟県西蒲原郡弥彦村麓6590
TEL:0256-94-2437 FAX:0256-94-3077